



# 日本蜜蜂の分蜂



<オシロシリーズ>

鎮守乃 もり

「ご主人様！た、たた、た・・・大変です！」

仕事を終えた私に寄ってきたのは『オシロ』。犬のゴールデンレトリバー。全身、金色に輝く毛並みを持ちながら、シッポだけは白い犬だ。しかもそばによってきたのは実体が無く、半透明な犬らしきモノ。幽霊というには遠く、幽体といったほうが近いような気がする。そんな彼女が驚いているのだ。  
・・・なんか違うかい？  
普通なら逆に驚かす立場だろうに。

「今日はなんですか、オシロ？」  
「庭が真っ黒でブンブンいってるんです！」  
涙目で正面にまわってきた。  
どうやら助けて欲しいらしい。  
「えーと」  
庭に目を向けて探すと、それはあった。  
ごろんと仰向けになって転がっている犬が見てとれる。  
「やれやれ・・・」  
白目だ。  
「ご主人さま・・・」  
涙目のまま、懇願するようにこちらを見ているのは幽体のほうだ。こうなるとどうしようもないので抱き上げ・・・ようとしたが重い。しょうがないので首輪に指をつっこんで引きずろうとしたら幽体のほうがさらに涙をうかべて首を横に振っている。

ぶんぶんぶん。

じゃあ、どうしろってんだ。  
「まったく、世話のやける・・・これならいいんだろ？」  
首がくたつとなった上半身を抱きかかえ、下半身を引きずる形で納得してもらった。  
本当はこの運び方もオシロは気に入らなかったようなのだが、こちらもいいかげんイライラしてきたので放置すると言うとしぶしぶうけいれたようだ。  
運んでいる（引きずっている）間は笑顔なオシロ。  
さっきまでの涙目はなんだったんだ？

小屋のそばまで本体を運ぶと落ち着いたらしく、幽体のオシロはいつもの定位置におちついた。  
「コラ」  
場所が違うだろうが。  
こいつが落ち着いた場所は私の背中である。  
私の頭の上にアゴを乗せ、両肩に前足を置いた形になっている。

むふー。

深い鼻息をはいたと思ったら、本当にくつろぎだしやがった。  
「で、今日は本体に戻ってから説明を始めないのか？」  
「痛いからヤ。」  
「？」  
あー・・・、蜂に刺されたのか。  
変なことやったんだろ、どうせ。  
「ちょっかいなんか出すからだ。でも、戻らないんなら今日は晩御飯は抜きにするからな。」  
「えー！？ひどいー。」  
「本体に戻らないでどうやってエサ食うんだよ、お前は。」

「……。」  
あ、むくれた。

ふと空を見上げるとソレは大量に舞っていた。  
一匹くらいなら気にならない蜂の羽ばたきでも、千匹を超えると  
折り重なった音がぶんぶん和大音量で聞き取れる。  
庭から見上げると澄んだ青い空のはずが黒っぼい。  
それらは小さな台風のごとく渦をまいていた。  
頭の上のオシロがちょっと興奮しているようだ。  
さっき、ちょっかいだして気絶したくせにもう忘れたか。  
「ご主人様、アレは何ですか？」  
「蜂だな」  
「ですよー。って、それぐらい分かります！なぜ、あのよう  
に空を回っているんです？」  
「あれはな……」

「蜂 分蜂 でググレカス」

「はいはい、パソコン用語ですね？聞き飽きました。  
というより、使えないんですけどPCは。」  
ぱんぱんと前足で肩を叩いてきた。  
「つまりだな……」

春の暖かい天気の良い日に、日本蜜蜂の分蜂（ぶんぼう）が始まる。  
巣によって分蜂（ぶんぼう）する回数は違い、2、3回はすることが多い。

「ってことだな。」  
「ふーん。つまり、本家から分家が出来て暖簾（のれん）分けしたということで  
讃岐うどんの老舗から看板分けた新店舗みたいなものなんですか？」  
「お前……分かって言っているのか？それとも適当に言っているのか？」  
「わふーん。」  
はぐらかしやがった。  
「ともかく、新しい女王蜂を筆頭にもうひとつの家が出来のさ。」  
「わふーん……」

ふんふんふん

ぱっと目を輝かした。  
「いいにおいがします！ご主人！！」  
「これは今晚の私の飯だ！お前のではない！！」  
「まあ、そうおっしゃらずに……あ、そのかまぼこ後でください。」  
頭上のオシロはずるずると目の高さまでずりさがってきた。  
「ああ、わかった、わかりました。もう、晩御飯にするから本体に  
もどりなさい。」  
「はいっ！」  
ヨダレを少々、夕日にキラキラと輝かせながらしゅいんと  
本体へ入っていった。

その瞬間

きゃいん！

痛覚が戻ったようで、オシロは小屋の中に走って逃げた。

「やれやれ・・・」

気が付くと先ほどまで響いていた羽音は全くしなくなっていた。  
そんな澄んだ夕日のまぶしさに目を細めながらひとりごちた。

もう、夏がくるな・・・。

<おわり>